入選

## 小さな傷の大きな優しさ

山口県　徳山小学校　六年
仲子　遥音

朝、顔を洗うときに鏡で見えるのは額の傷。私の額には、小さな傷があります。この傷を見ると、あの日のできごとを思い出します。

２年前、私は友達と公園で遊んでいました。母にお弁当を作ってもらい、仲良しの友達二人と長く遊べるのをずっと楽しみにしていたので、かなりはしゃいでいました。

追いかけっこをしていたとき、友達に追いつかれそうになったので急いでふり返ると、私は、遊具に思いきりぶつかってしまいました。

「大丈夫？血が出ているよ。」と、友達が心配してくれましたが、痛さより恥ずかしさの方が大きくて、

「大丈夫。平気、平気。」と、ごまかしてしまいました。すると、近くにいたおじいさんが、

「大変、これはおでこをぬってもらわないといけないよ。お家の人に連絡取れるかな。」

と、声をかけてくれました。

父が近くで買い物をしているからと言っていたので、父に電話をすると、おじいさんが途中で電話を代わってくれました。そして、かけつけてくれた救急車に私を乗せた後、孫らしき小さな子といなくなっていました。救急隊員の人が、けがの応急処置をしてくれて、すぐ父が到着しました。父と救急隊員の人が少し話をした後、私は救急車で病院へ連れて行ってもらい、すぐに額をぬってもらいました。

後から父に話を聞くと、おじいさんがすぐ救急車を呼んでくれたので、応急処置が早かったこと。救急隊員の人が本来連れていく救急病院ではなく、外科医が当番の病院に連絡を取ってくれたので、傷の処置に慣れていたお医者さんにみてもらえたこと。お医者さんも傷が残らないように糸など選んで使ってくれたので、傷が小さく済んだことなど、たくさんの人の優しさがあったことがわかりました。

おじいさんにお礼が言いたかったのですが、父が名前などを聞く前にいなくなってしまったそうで、言うことができませんでした。母が、

「じゃあ今度は遥ちゃんが、だれかが困っているときに助けてあげる人になれるね。」

と言ってくれました。

自分が受けた親切を、ほかのだれかにします。そしてその人は、また別のだれかに親切にします。そうすることで、みんなが幸せな気持ちになれます。とてもすてきなことだな、と思いました。でも、何をしたらいいのかわからずなやんでいると、母が、

「ありがとうって言ってもらうこと、たくさんあったでしょう。」と、教えてくれました。

クラスに入れない子に毎日、何でもない話をしていると、普通に入れるようになったと言われたこと。通学路に名札が落ちていたので、家まで届けたことなどをあげてくれました。私にとっては何でもない日常ですが、それをありがたいと言ってくれる人がいることの喜びを知りました。

鏡に映る小さな傷。この傷は、みんなの優しさでできています。私はこれから、たくさんの人にその優しさをつないでいきたいです。